

2021 年度

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程学位請求論文

クオリタティヴ・エヴィデンス

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程絵画専攻（油画研究領域）

岡本羽衣

要旨

本論は、質的証拠（クオリタティヴ・エヴィデンス）によって、人間の暗部に触れることがどのような可能性をもたらしうるのか、という問いを主題に、その探求を芸術分野による実践を通して論考した表現論である。

この問いを考察するために、まず主題を大きくふたつに分ける。ひとつは、人間の暗部とはどのような存在なのか、というわたしたちにとって「理解し難い（しようとしない）」領域についての問いである。もうひとつは、人間の暗部に触れるための実践的な表現方法、つまり、実感を伴った経験を与える視覚的芸術によるアプローチには、どのような可能性がありうるのか、という問いである。

わたしの作品を構成する主要な概念である質的証拠（クオリタティヴ・エヴィデンス）とは、視覚から獲得される質的な経験の想起によって、心理的作用に影響を与える証拠を指す。観る者が得る実感とは、観る者自身の過去の経験や記憶といった「質的な経験＝身体性」に依拠しているのではないか。このような推測から、個人の心理に深く結びついている質的経験そのものを、わたしは人間の内面に残存する質的証拠と定義した。

第1章では、視覚媒体がどのようにして観ることに実感を与えられうるのか、視覚的リアリティについて検証した。ここでは特に、観る者が、事物に触れずとも写真や映像によって対象をリアルなものとして実感しているという出来事について言及し、また同時に、そのような実感の獲得は、観る者自身の身体的（触覚的）な経験がそのもの自身に残されていることに依拠しているのではないか、という点を考察した。つまり、わたしたちが写真を観た際に、それが「本物である」と認識できるのは、メディア自体の発達による鮮明さではなく、「たしかにそれはあった」と観る者自身の過去に触れた身体的な経験が想起されることによって実感を獲得すると考えた。また観る者の中で想起される、身体的な経験の性質のひとつである「不快」と感じる心理は、その者自身が抱えている不安や恐怖を表す「質的証拠」なのではないかという推測から、わたしたちがそのような感覚を抑圧し、追いやっていることの問題、つまりそれまで意識し得なかった暗部の領域を抱えている可能性があるかと推考した。

第2章では、わたしたちが意識しえない領域を直喩的に捉えた暗部の領域とは何なのか、また、それを意識化することは、どのような可能性を意味するのかを論じた。特に、負の歴史とされる史実から、主にドイツと韓国の収容所のリサーチから監獄の性質を辿り、管理社会や抑圧的な空間を造り上げる人間の暗部の領域を考察した。その論考から、絶対的な他者（社会や親和的な他者）によって自己の存在を否定されることへの不安を抱えていること、また暗部へと抑圧している純粋な欲望＝身体性や残忍な行為への内的な葛藤が生じている可能性について言及した。現代社会において、わたしたちが「加害者」とされる者の暗部を思考することは、純粋な欲望＝身体性が自己の中にもあることを認識し、それまで理解できなかった他者の存在を自分の中に確認することである。そして、暗部が〈自－他〉にあるこ

とを認める自己了解の可能性をもつことは、わたしたちにとって自己に他者性を見出すための重要な契機になりうるのだと考えた。

第3章では、不可視化された自己に存在する欲望＝身体性、すなわち暗部の領域に触れるための方法として、観る者の質的証拠を想起させ、人間の暗部である「語り得ない」領域を認識させる実践的な表現方法について論じた。博士審査展提出作品《Morus》では、その実践のひとつの事例として、わたしが児童期に経験した出来事をもとに、その暗部の領域に触れることを主題としたパフォーマンス及びインスタレーション作品を発表した。パフォーマンスでは、わたしが子どもの頃に出会った異常性をもった他者を、演じる行為を介してパフォーマー自身の身体に取り込むことによって、理解し得なかった他者とわたし自身の暗部に触れること、またその過程を鑑賞者と共有する場の重要性について述べた。またインスタレーションでは、身体（欲望）性を認識する場＝「質的証拠の場」によって、その空間から観る者自身の暗部に触れる方法について述べた。具体的には、まず空間を変容させる行為者（パフォーマー）の不在性によって、その行為のディテールから見えない他者を想起させた。またもうひとつの試みとして、具体性を損なわせ抽象化したオブジェクトを配置することによって、質に意識を向かわせることで質的証拠を顕在化させた。これらの方法を用いることによって、観る者自身が暗部に追いやっていた異質性を認識する空間構造をインスタレーションで試みた。

これらの実践的な身体を基軸にした本作品《Morus》は、わたし自身が経験した質的な経験を通じて、いくつかの質的証拠をとりだし、身体的な経験に付随する醜いとしてきた欲望を想起させ、わたしがこれまで正常ないし異常としてきたことの基準そのものを揺さぶり、観る者（わたしたち）の理性を試すような作品として提示した。

以上の論考によって、現代を生きるわたしたちが遠ざけてきた、理解し得ない他者を視覚的アプローチである質的証拠を通じて認識することは、これまで遠ざけてきたわたしたち自身が抱えている醜い欲望＝身体性を了解させ、さらには人間の暗部という「語り得ない」存在をより深く認識しうる可能性があると考え、結論とした。